慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「笠間長者鶴亀物語」解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1996
Jtitle	三田國文 No.24 (1996. 12) ,p.47- 51
JaLC DOI	10.14991/002.19961200-0047
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19961200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

［笠間長者鶴亀物語］解題・翻刻

石川　透

解題

『笠間長者鶴亀物語』は、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』一九八二年八月）には、大東急文庫蔵奈良絵本の一本のみが著録され、その本は、古梓堂文庫蔵として『室町時代物語集』五（一九四二年九月）に翻刻されている。近時、元の本の形からすれば大東急本と同じ、半紙本型奈良絵本が、藤井隆氏により『中世古典の書誌学的研究　御伽草子編』（一九九六年五月）に翻刻された。また、それらとは別に、巻頭の詞書の欠けた大型奈良絵巻が『大阪青山短期大学所蔵品図録』第一輯（一九九二年十月）に紹介されている。ここに翻刻紹介するのは、さらにそれらとは別の、元大型奈良絵巻である。元としたのは、現在挿絵の部分が全て取られているからであるが、幸いに本文は全て揃っている。翻刻されている大東急本・藤井本と比較すると、大東急本にやや近いが、小異が存する。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、架蔵
形態、巻物、一軸
時代、［江戸前期］写
寸法、縦三三・二糎
表紙、草花模様繡表紙
見返、布目金紙
外題、ナシ
内題、ナシ
料紙、下絵入り鳥の子紙
字高、二六・二糎
印記、ナシ

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

［笠間長者鶴亀物語］

むかしか今にいたるまて、めてたきためしにする事は、鶴と亀とのことふきの、千世よろつ代もかきりなき、よはひはつきぬ契りとて、二葉の松のとしをへて、木するは雲にさすえたの、

しけるわか葉はふかみとり、かはらぬいろのためしとて、かす〳〵すたつひな鶴も、をのかすみかとさたむらん。又色かへぬ呉竹の、そのふにうへしかけしけき、御池の水はそこきよく、きしのいはほにむすこけの、久しき世々をしらするに、あまの羽ころもまれにきて、なつともつきぬあととめて、のとけき空に出てあそふ、亀のこゝろもいちしるし。

こゝに、人皇第六代に、あたらせ給ふみかとをは、かうあん天皇とそ申奉りける。このみかと、世をおさめまし〳〵て、くにのまつりこと、すなをにして、御めくみ、あまねく、四つのうみのほかにをよひけれは、あめつちも、これにかんして、ふく風、えたをならさす、ふる雨、つちくれをやふらす、たなつもの、はたつもの、ゆたかにみのりて、民さかへ、くにのそむくものなけれは、はこふみつきのかす〳〵は、月にかさなり、日にそひて、おさまれる世のしるしとす。

［挿絵・第一図・欠］

そのころ、ひたちのくに、かさまのこほりといふところに、二人のちやうしやあり。ふたつの山をすみかとして、地をたいらかにして、殿つくりし、三つは、四つはにたてならへ、いらかをみかき、玉をしき、そのきれいなる事、いふはかりなし。きたなる山のちやうしやをは、あさ田君と名つく。一人のむすめあり。その名を、かたおりひめとそ申ける。みなみの山のちやうしやをは、をしつひこと名つく。一人の男子あり。その名を咲花丸とそ申ける。

しかるに、かたをりひめ、すてに、人となり、みめかたち、世にたくひなく、こゝろさま、ゆうにして、なさけのいろ、ふかく、ものをあはれみて、こゝろさし、うるはしかりけれは、ちゝのちやうしや、いとゝてうあいして、いつきかしつくほとに、日にそへて、かたちたをやかに、ひすいのかんさしは、春風になひくやなきの糸をねたみ、まゆすみの色は、えん山のみとりの梢をそねみ、雪のはたへ、あふらつきて、ひかりさしそふ心ちそする。たんくはのくちひるには、あい行のさうをふくみて、まことに、たくひなき有さまなり。みやこに、もれきこえなは、御てんのうちに、かしつき入られ、やことなきくらゐにも、のほり侍らんものと、父母ともに、つね〳〵おもひまいらせけり。されとも、みやこちは、はるかのくにをへたてたれは、いまた、聞もならはす。

しかるに、ひめきみ、ある日のことなるに、にはに立いてゝ、松の木するをみ給へは、ふたつのつるありて、すをつくりて、やう〳〵、かいこしゆくして、十二のひな鶴、そのなかにあり。姫君を見まいらせても、さらに、おそるゝけしきもなく、なつかしけにみえけれは、ひめ君も、きとくの思ひありて、あふきをあけて、まねき給へは、ふうふふたつの鶴、やかて、姫君のまへにきたり、両のつはさをひろけて、まひあそふ。

［挿絵・第二図・欠］

是より、ひめ君になつきて、ふうふのつるは、又よそにもとひゆかす、にはにおりたち、木するにのほり、十二のひなつる、すてに、両羽とゝのをりて、ちからつき、よき日に、す出する事、てうるいにかきらぬものなり、さるによつて、こくうに、かけるほとになりけれは、おやとり、もろともに、にはにをりたつて、ひめ君にちかつき、又時いたつては、おり〳〵よそにも

とひちりつゝ、にはの松を、をのかすみかとするこそきとくなれ。
しかるに、みなみのちやうしやの子、さく花まるは、これも、そのかたち、世にこえてうるはしく、しかも、いろこのみなりけれは、たゝ世のつねの女なとをは、さらに、あるものかとも思はす、あさゆふは、そことなく、こゝろうかれて、あちきなく、春の花には、ふく風の花をちらして、なさけなき事をうらみ、秋の月には、うき雲のかゝるをなけき、むしの音の、くさむらに、よはりゆく事をあはれみ、おりにふれ、ことによそへて、歌をよみ、こゝろをすまし侍りけり。
ころは、みな月の十日あまり、涼しき風をもとめて、御いけのほとりを、たちめくりけれは、水そこより、ひとつのかめ、うかひあかりて、いはほの上にあそひつゝ、さく花まるを見て、まことに、なつかしけにおほえたり。さく花まる、あやしく思ひ、立よりて、これをとらへ、手にのせて、もてあそふに、さらにおそるゝ色なく、甲のうちにもかくれすして、うれしけにみえたり。水の中にはなちたりけれとも、そこにもしつます、又立かへりて、さく花わかにちかつきけり。さては、われに、なれしたしみけるよとて、つねは、そはにをき侍るに、池にかへらんともせす。日くるれは、池にはなち、夜あくれは、又いけより出て、ちかく、きたりあそふ事、さなから、こゝろありかほなり。

［挿絵・第三図・欠］

されとも、さくはなまるは、こゝろにかなふ女もなし。たゝ、あけくれは、あちきなく、かめをあいして、月日ををくり侍るに、ある日の雨中のつれ〳〵に、あたりちかき人きたりて、さま〳〵ものかたりしけるつゐてに、申けるは、「わかきみは、しろしめされすや。北の山の長しやのひめ君こそ、世にならひなきひしんなれ。はなのかたちかゝやきて、たをやかなる御すかたは、やなきのえたの、はるかせになひくよそほひうるはしく、まことに、たとへんかたなく、あてやかに、しかも、心のなさけふかくわたらせ給ふ」なと、さま〳〵かたりけれは、わか君は、聞よりはやく心まとひて、いまたみぬ人を、はや、恋こゝろにあこかれつゝ、それより、ひたすら、思ひのゆかにふししはの、こりたくむねのけふりとなりつゝ、よるひるとなく、わすられて、とやせんかくやせんと、あんし給へとも、玉たれのひま、もりくる風のたよりもなけれは、かくとしらせんやうもなし。あまりのことにたへかねつゝ、

うきことのかきりとたにもしらせはや
もゆる思ひは君ゆへそかし

と、かやうにかきつらねて、日ころ手なれしいけのかめに、うちむかひ、「をのれも、こゝろあるものなれは、しのひて、かたをりひめにまいらせよ」とて、なけゝれは、いけのかめは、この歌をくちにふくみて、きたのちやうしやのやかたをさしてゆきぬ。
おりふし、姫君は、にはに立いてゝ、鶴にたはふれておはしけるところに、此歌をおとしたり。姫君、あやしかりて、とりあけみれは、をとにきこえし、いろこのみのさくはなまるの、あこかれて、やるかたなきおもひを、しらする文なりけり。姫君、やかて、あはれなるかたに、こゝろひかれつゝ、いなにはあらすいな舟の、こかるゝおもひをうきなみの、うちよすることの葉こそ、すてかたけれと、中〳〵こと葉はなくして、

うきことのかきりとはいさしら浪の
きしによるをはつとふへきかは

と、かやうにかきて、なけられしかは、いけのかめ、またくちにふくみて、たちかへりつゝ、わか君にうちむかひ、御まへにさしをきたり。うれしくおほして、いそきひらきてみ給ふ。「きしによるをは」と、よみけんことの葉、さては、夜ことにかよはゝ、いかてかつれなからんと、その夜、やかて、立しのひて行給ふ。姫君もいは木ならす、はや、うちとけししたひもの、結ふ契りはあさからぬ、水もらさしとかたらひ給ふ。

［挿絵・第四図・欠］

かくて、行かよひ給ふほとに、わりなき中となりて、年月をゝくり給ふ。きのふけふと、あかしくらすに、はや、むそちの春秋ををくりけれとも、二人のすかたは、とこなつの花のかほはせ、すこしもかはらす、なをそのかみのことくにして、いよ〳〵うつくしうかゝやきわたりて、ひかりさしそふはかりなり。めしつかはるゝ人〳〵は、わかくさかりなりけるすかたの、おいおとろふるにつけても、ふしきなる事かなと、思はぬものはなし。いかにしてか、二人の君たちは、かくときはなるよはひをゆつりて、ことふきをたもつに、つきせぬいはれをしめすとおほえたり。

ある日のことなるに、わか君、ひめきみ、ひとつところにあつまりて、何とかは、しらす、御物かたり、こま〳〵とおはしけるか、ふうふの鶴を、のきちかくまねきよせ、わか君は、亀を御手にするなから、ひめ君ともろともに、ふたつのつるにうちのり、雲ちはるかにあかり給ふ。めしつかはるゝものとも、おほきに、おとろきあやしみて、「これは、いかなるゆへやらん」と、みるところに、ゆきかたなくとひさりて、七日といふ夜のあけかたに、もとのやまにかへりたまふ。

かくて、ひとつのつほのうちより、くすりをとりいたして、めしつかひ給ふものともに、あたへられけれは、年月、よはひ、かたふきて、おいおとろへたるものとも、一とうにわかやきて、もとのすかたとなりかへりけるこそ、きとくなれ。されは、ふたりの君たち、ほうらい宮にゆき給ひて、ふらうふしのくすりをとりて、かへり給ふといふ事、うたかひなし。

［挿絵・第五図・欠］

この事、すてに、かくれなかりしかは、ちかきとをきをいはす、長しやの御うちをのそみて、まいりつかふる事、いふはかりなけれは、両方の御うちに、かみしものなんによ、まことに大せい侍り。家のうちのにきはしさ、えよう栄花にさかふるありさま、こゝろにかゝることもなし。みやこに、この事もれきこえけれは、みかと、きとくのおもひをなし給ひ、やかて、ちよくしを立て、みやこにめしのほせらるゝに、ふうふのきみは、つるにのりて、こくうをかけり、ちよくしにさき立て、みやこにのほり、かくとそうもん申されしかは、みかと、きこしめし、「そのちやうしやなりといへとも、しなくらゐもなくては、みかとに、たいめんかなふへからす」とて、ふうふのものに、官位をすゝめ、わか君をは、せうなこんになされ、姫君をは、ないしになし給ひ、やかて御たいめん有。

しかるに、「このむそちあまり、七十のとしをへて、ふかきちきりをなしつゝ、さらに、かたちをとろへす、なを、いにしへのすかたにて、つきぬいのちをたもつといふ。そのゆへ、い

かに」と、ちよくもんある。ふうふの人、うけ給はり、「つるは、これ、仙家ののりものとして、千年の後は、しろくなり、いたゝきあかく、こゑすみて、きうかうになけは、天に聞ゆ。かめは、又、千年の後は、よくものいふて、ちゑあり、その身かろくして、はちすの葉のうへにのる。このふたつのもの、いのちをなかくたもつ事、つねは、くひをしゝめて、気をふくし、心にかゝる思ひなく、仙家にちかつきて、不老不死のみちをつたふ。われら、これをてうあいして、いつくしみ侍りしに、いつしか、この長生不死のみちをしめし、我らにをしへ侍りしゆへに、よはひかたふかす、いのちは、つくる事もなし。ことさら、せん家、ほうらいの宮のうちに、ゆきかよへは、ふしのくすりをつたはりて、めしつかふものまても、よはひをかへし、いのちをのへ、二たひわかくなす事も、鶴と亀とのとくならすや」と、申あけゝれは、みかと、きとくに御かんありて、「さらは、なんちらかすむところに、みゆきあつて、そのありさまを、えいらんあるへし。されとも、秋津しまのみやこより、ひたちのくにまては、みちはるかにとをけれは、いかゝせん」とのちよくちやうなり。ふうふの人、申けるは、「御くらゐを、太子にゆつり給へ。御よはひ、いつまてもかはらぬ事を、しめしまいらせん」と申す。「さらは」とて、御くらゐを、かうれい天皇にゆつり給ひけり。この御宇、ことに、世のまつりこと、すなほにして、すなはち、御そくゐの御ことを、とりをこなはせ給ふ。

［挿絵・第六図・欠］

かくて、御そくゐも過しかは、かうあん天わう、御とし百三十七さいの、秋九月のことなるに、わか君、こくうをまねきたまへは、ひとつの白鶴とひきたれり。みかとを、これにのせまいらせ、ふうふ二人、御ともにて、ひたちのくにへそとひける。やかて、くにゝもつき給ひしかは、ふらうふしのくすりを、たてまつるに、御すかた、わかやかになり給ふ。又、なつつくりし給ひて、山のうちにすませ給ふ。日ころめしつかはれし、くきやう、殿上人、御あとをしたひてまいり、つかへたてまつる。すてに、みかとも、せん家にかよふ身と成給へは、さてこそ、みかとの御ゐんきよあるを、仙洞仙院とは申なれ。

［挿絵・第七図・欠］

今のみかとより、ちよくしありては、ちゝみかとを、神とあかめ給ふ。すみ給へる山を、いたしき山と名つけ、御神をは、いたしきの明神といはひ給ふ。さてそのゝち、ふうふの君をも、神にいはひ給ふ。住給ふ山の名は、北は、めつくは、みなみは、おつくはとて、ふたつのみね、ならひたり。すなはち、ふうふの人のすみし山なれは、つくはねの神とあらはれたまふ。しかれは、鶴と亀は、日ころ、てうあいし給ふところ、めてたきためしのものなれはとて、ふうふの神のまつしやとして、つるの宮、かめの宮と、あかめられ給ひて、いまの世までも、つくはねの、ふかきちきりは、あさか山、久しき御代は、あさからぬ、神のめくみは、ひさかたの、いく千世までも、かはらすつきぬよはひこそ、かきりなし。つるとかめとのことふきは、たみあんをんのもとゐ、たみやすかれは、君もゆたかにましませは、はこふみつきは、いやましに、めくみは世ゝに、ありあけの、月かけしるき、玉かきの、宮ゐ代々に、あととめて、立やとりゐの、二はしら、ふとしくたてるそ、ありかたき。